

るのかもしれない。自覚の観点から「老い」を捉えることの一面性をあらためて考えさせられる。単に自分は「若い」とか、「年寄り」であるとかいう自覚だけでは把握しきれない「老い」の始まりがあるような気がする。

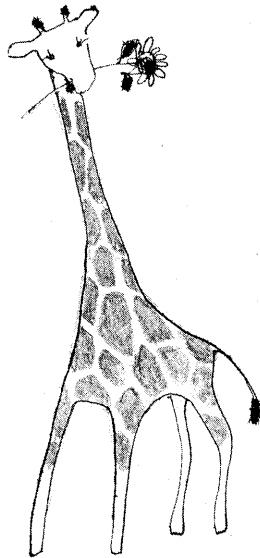
参考文献

佐伯胖著 認知科学の方法、認知科学選書10巻、東京大学出版会、一九八六

(東京都老人総合研究所)

初心忘るべからず

松尾 葉子



インタビューで何度となくたずねられる質問に「どうして指揮者になろうと思ったのですか」というのがある。私は、指揮者になろうと決意したのか、指揮をしたかと思っただのか、あまりよく覚えていない。それは、幼い頃から指揮者にあこがれていたわけではない

からだ。男性ならばパイロットや野球の監督、指揮者など、多くの人を統率する職業にあこがれるのだけけれども、女性の場合は少し違うように思う。私は小さい時からピアノのレッスンを続けていたので、将来はピアニストになりたかった。やはり舞台上で素敵なドレス

を着て演奏してみたいと夢みていたのだ。

結局、お茶の水女子大学の音楽教育学専攻に入学して、音楽の勉強を続けることになった。音楽教育のためには、いろいろな知識が必要ということで、ピアノを弾くことはもちろん、歌や作曲、音楽学など幅広い分野にわたって勉強しなければならなかった。大学三年生の時に、毎年音楽科が行っていた「オペラ」を上演することになり、曲目やオペラの配役、オーケストラ編曲、舞台装置などすべて学生が中心になって決めなくてはいけなかった。この時、私と「指揮者」という職業との運命的な出会いとなる。指揮法について何の知識もなかった私は、ほとんど独学で勉強するよりほかになかった。本を読んでも実際の指揮法は、ほとんど理解できず、オペラの練習を見学に行って学ぶことが多かった。今から思えば何とむちゃくちゃな指揮をしていたことかと恥ずかしくなるのだけれど、自分の思っていることを表現したいという意欲は人一倍もっていたので、何とかオペラを指揮することができ

たのではないかと思う。小さい頃からピアノを学んできた私は、たくさんの人と力を合わせて一つのものを築きあげるといっておもしろさにひかれ、指揮をするこの魅力にとりつかれてしまった。

ピアノという楽器は自分の思っている音楽を、そのまま表現できてしまう。一方、指揮をするということは、自分の思っている音楽を体で表現したり、説明して、オーケストラや歌い手に理解して演奏してもらうことだから、直接の表現ではなくなる。しかし指揮者とオーケストラの奏者の気持ちが一一致した時は、感動的な演奏になるわけで、一人でピアノに向かって演奏するよりもっと大きな感動を得られることになる。

大学の学園祭で初めて指揮をした時は、学生仲間のまま、ごとのような練習だったと思う。その後、東京芸術大学の指揮科に入りたいと思い、受験勉強を始めたのだが、その当時は、女性の指揮者など本当に珍らしく、はたして入学させてもらえるのかと心配でもあった。指揮科に入学してから、むしろ本当の意味での勉

強が始まったと思う。指揮をするということは、車の運転と同じで、実地経験を多くした方がスムーズに音楽を表現できるし、オーケストラをまとめることにも慣れてくる。先生から直接レッスンで教わることも大変重要なんだけど、オーケストラの練習にたずさわって学ぶことが数多くある。たとえば、オーケストラのアンサンブルが乱れてきたらどうしたらよいのか、曲のテンポを変えたり、だんだん速くするのは、どのような方法が必要か、など頭の中だけで考えていてもうまくいくものではない。指揮法を学ぶには、ある種の訓練が必要で、できるだけ多くオーケストラを指揮した方が体得できるのである。

私が指揮を始めるきっかけになったのがオペラであったから、オペラに対する情熱はかなり強い。オペラを指揮するのとコンサートを指揮するのでは何が違うのか。オペラは、オーケストラや歌手、合唱、そして多勢の舞台関係者が力を合わせて一つの人間のドラ

マを描くものである。多勢の力が必要となる。したがって意見のくい違いが時々生じる。音楽上の観点からと演出上のそれとは、かなり違うことがある。相手の意見を理解しようとしながら、自分の意見も通さなければいけない。オペラを上演するには、コンサートと比べものにならないほど準備に時間を要する。しかし、この練習期間が話し合いの場をもつ意味で大変おもしろい。

さまざまな問題乗り越えてオペラを上演した時は、本当に感激することが多い。心の底から、お疲れさまでした、と言える瞬間である。この感激を味わうたびに、指揮者になってよかったと思う。そして運命のいたずらであった学園祭のオペラを思い出すたびに、「初心忘るべからず」と自分に言いきかせているのである。

(東京芸術大学・指揮科)